

| | | |
|----------|--|-----------------|
| 氏名（本籍） | ミズノ 水野 | ヒトシ 均（東京都） |
| 学位の種類 | 博士（音楽） | |
| 学位記番号 | 博音第67号 | |
| 学位授与年月日 | 平成17年3月25日 | |
| 学位論文等題目 | 論文「16世紀ヴェネツィア・サン・マルコ寺院のオルガンとその音楽」 - そのストップの選択に関する考察 - | |
| 論文等審査委員 | | |
| （総合主査） | 東京芸術大学 | 教授（音楽学部） 廣野 嗣 雄 |
| （演奏審査主査） | ” | ”（ ” ） 廣野 嗣 雄 |
| （演奏副査） | ” | ”（ ” ） 鈴木 雅 明 |
| （ ” ） | ” | 助教授（ ” ） 大角 欣 矢 |
| （論文審査主査） | ” | 教授（ ” ） 廣野 嗣 雄 |
| （論文副査） | ” | ”（ ” ） 鈴木 雅 明 |
| （ ” ） | ” | 助教授（ ” ） 大角 欣 矢 |
| （ ” ） | ” | ”（ ” ） 畑 瞬 一郎 |

（論文内容の要旨）

15世紀末から、イタリアにおける盛期ルネサンスの芸術文化の拠点はヴェネツィアであった。音楽においては、ヴィラルトやザルリーノ、ドナーティといったサン・マルコ寺院の楽長や、ピュース、パドヴァーノ、メールロ、アンドレアおよびジョヴァンニ・ガブリエリといったオルガニスト達の働きによって大きな変革を遂げた時代である。彼らのオルガン作品はヴェネツィアで出版され、今日もしばしば演奏されている。それらの作品は、イタリアオルガン音楽史を語る上で重要な位置を占めることから、初期イタリア鍵盤曲集として出版される楽譜に、必ずと言っても過言ではないほど数曲含まれる。しかしそれらの曲集は、1500年から1600年代中頃のフレスコバルディの作品までを包含してしまっており、解説などでは音楽様式の変化の経緯や地域的な特徴に触れられることが少ない。またオルガンのストップの選択法に関しても同様で、ディルータの『イル・トランシルヴァーノ（1609年）』およびアンテニャーティの『オルガン技巧（1608年）』の記述を例として用いられることが多い。果たして当時のオルガン作品を演奏する際に、ディルータおよびアンテニャーティのみを当てはめることが正当なことなのか、また楽器の地域的な違いによる差異は無かったのかなど、様々な疑問が起こってくる。残念ながら1500年代ヴェネツィアにおけるオルガン作品のストップの選択法について、ヴェネツィアの作曲家が当時書き残したものは今のところ発見されていないことも確かである。しかし、当時のヴェネツィアの楽器の状況や作品のスタイル、また社会的背景を比較検討することによって、その地域特有の状況が明らかになり、そのことによって、コロンビ、ディルータ、アンテニャーティの記述を演奏に取

り入れるための明確な判断基準と、より確実な演奏の裏付けを得ることができると考えられる。本研究は、16世紀におけるヴェネツィア・サン・マルコ寺院のオルガンおよびオルガン作品を検証することを通して、当時の音楽的背景や作曲家の音楽観を考察し、サン・マルコ寺院のオルガニストの作品の演奏法に関する不可欠な情報、特にストップの選択法について論じたものである。

この考察を行うにあたり、まず序論において、本論で扱うサン・マルコ寺院のオルガンに関する歴史的背景を明らかにするために、16世紀に至るまでのイタリアにおけるオルガン製作の歴史と当時のオルガン及びオルガン製作に関する一般的な概要を示した。第1章では、サン・マルコ寺院で活躍したオルガニストの当時出版された作品を中心に、その作品の様式や作曲の根底にある音楽論との結びつきについて論じた。続く第2章では、当時のサン・マルコ寺院のオルガニスト達はその作曲の演奏に用いたオルガンを、当時の記録やマッテゾンの記述を引用しながら考察して、オルガンのディスプレイに関する見解を示した。第3章においては、前記のディルータやアンテニャーティ、ヴァルヴァゾーネの教区記録に残されているコロンビのストップの選択に関する記述を比較検討し、その記述の元になったオルガンとその記述内容について再検討を行った。

これらのことをふまえて、結論において、1500年代のヴェネツィアがローマ・カトリック教会や反宗教改革の影響をさほど受けずに、イタリアの他地域とは異なった独自の音楽状況にあったこと、また1500年から1600年にかけてオルガン音楽そのものに変化があったことをふまえて、ヴェネツィアのオルガン音楽を演奏する際のストップの選択法と作品との関連について論じた。

また、先行研究においてアンテニャーティの著作『オルガン技巧』が参考資料の中心として扱われてきたことに対する問題点を指摘した。すなわち、長年に渡って引き継がれたオルガン製作者一族の書『オルガン技巧』は非常に貴重ではあるが、そこに書かれている内容の全てを当時のオルガンやオルガン音楽全般に当てはめることはできない。アンテニャーティが書き残したこの著作自体が、今日の我々の社会において当時のオルガンを語る上で不可欠の資料として過剰なまでに重要視され、アンテニャーティのみが当時を代表する最も優れたオルガン製作者であるとする固定観念が定着してしまう状況をも生んでいる。今後は個々のオルガン製作者の特徴を考慮に入れた客観的で公平な研究がなされるべきこと、またオルガン作品についても、本論文が扱ったフレスコバルディ以前のイタリア・オルガン音楽の更なる研究が期待されることをむすびとした。